

クラウドサービスを利用した業務効率化の取り組み

紀北家畜保健衛生所
○坂田明子 安田裕子
鳩谷珠希

【背景及び目的】

和歌山県はデジタル技術を活用した業務改善（DX）を推進しており、令和4年8月から業務アプリ作成クラウドサービス「kintone」（サイボウズ株式会社）を導入している。

当所では従来、薬品の在庫管理を紙台帳で行っていたが、所有する薬品が多いため（約1,300品目）、薬品の検索や台帳の更新・整理の作業に時間を要していた。また、野生いのしし豚熱検査は、用紙を用いて関係機関と個別に連絡を行っていたため、検査受付および結果報告に時間を要していた（令和6年度検査頭数473頭）。そこで、これら両業務の効率化のため、kintoneを用いてアプリを作成し、本年度より運用を開始した。

【方法】

以下のアプリを作成し、関係機関と連携して運用を開始した。運用開始後、アプリ利用者を対象に意見調査を行い、回答を踏まえて改善を行った。

（1）薬品在庫管理アプリ

薬品の種類に応じて「毒劇物」、「一般薬品」、「動物用生物学的製剤」、「診療用医薬品」の4つのアプリを作成した。例として毒劇物アプリの薬品一覧画面を図1に示す。

これらのアプリは畜産関係機関（紀北および紀南家保、畜産試験場、養鶏研究所、畜産課）で共有し、相互に保管状況を閲覧可能とした（図2）。なお、薬品の受払等の編集権限は各所属のみとした。

また、意見調査で得られた改善要望を受け、毒劇物アプリでは毒劇物の使用記録などを更新した際、管理者へ通知メールが送信されるよう設定した（図3）。

（2）野生いのしし豚熱検査アプリ

アプリは各振興局、紀北および紀南家保、畜産課の間で共有し、検体情報や検査状況を閲覧可能とした。アプリの検査受付画面を図4に示す。アプリと連携した検査受付フォーム（以下、受付フォーム）を作成し、従来は用紙に記入していた検体情報を受付フォームから入力することができるようにし（図5）、入力を振興局担当者に依頼した。また、受付フォームでは必須項目を「入力必須」として設定し、これらが入力されていないと送信できない仕様とした。豚熱検査を実施後、家保で検査結果をアプリに入力し、アプリを通

じて関係機関へ共有した（図 6）。

【結果】

（1）薬品在庫管理

薬品を検索する際、従来は紙台帳や保管場所ごとにシートがある Excel ファイルから検索していたため時間を要していたが、アプリでは絞り込み機能を用いることで、薬品名や保管場所などの条件から容易に検索ができるようになり、検索時間が短縮した。また、従来は保管場所を変更した際に、Excel ファイルの修正に加え、紙台帳の差し替え作業が必要であったが、アプリでは保管場所を変更入力するだけのため、作業時間が短縮した。さらに、アプリを畜産関係機関で共有し保管状況を相互に閲覧できるようになったことで、薬品の融通が容易になり、購入量の削減につながった。

利用者への意見調査では、8割以上が「薬品の検索性」や「保管情報の見やすさ」が向上し、総合的な業務改善効果を実感しているとの回答を得た（図 7）。

（2）野生いのしし豚熱検査

従来の野生いのしし豚熱検査の流れを①から順に図 8 に示す。まず捕獲者が採取したいのしし血液と検体情報を記入した検査受付用紙（以下、受付シート）を、市町村を經由して振興局が受け、家保へ検査依頼を行う。次に、受付シートの検体情報を、家保が国報告用 Excel ファイル（以下、Excel ファイル）へ転記入力する。その後、家保から畜産課へ検査予定を連絡するが、その際に受付シートと Excel ファイルをメールに添付して送付する。検査実施後、家保は受付シートに結果を記入するとともに、Excel ファイルにも入力する。検査結果は、各振興局、畜産課および紀南家保へそれぞれ連絡するが、その際も受付シートと Excel ファイルをメールに添付して送付していた。

従来は、家保に届いた受付シートに記入漏れが見つかり、家保から振興局へ個別に問い合わせることが度々あったが、アプリ導入後は受付フォームに必須項目を設定したことで入力漏れが無くなった。また、受付フォームに入力された検体情報がアプリへ自動反映されることで、Excel ファイルへの転記作業が不要となり、転記に伴う入力ミスが無くなり情報の正確性が向上した。さらに、外部から入力することが可能な利点を活かし、市町村に入力を依頼した振興局もあった。また、検査結果についても、関係機関がアプリ上で直接確認できるようになったことで、個別のメール連絡が不要となった。

これらの改善により、紀北家保における検査受付および報告に要する時間は、アプリ導入前と比較して週当たり約 120 分短縮した(図 9)。

利用者への意見調査では振興局担当者の 6 割以上(図 10)、家保および畜産課担当者の 8 割以上が業務改善効果を実感しているとの回答を得た(図 11)。

【考察】

kintone アプリを導入したことで、薬品在庫管理と野生いのしし豚熱検査の両業務を効率化することができた。kintone はアプリの運用中であっても利用者の要望に応じて項目追加やレイアウト変更などの改善を行うことが随時行える点が特徴である。この特徴を活かして継続的にアプリの改善を行うとともに、他の業務についてもデジタル技術を活用した業務効率化を進めていきたい。



図1 薬品一覧画面

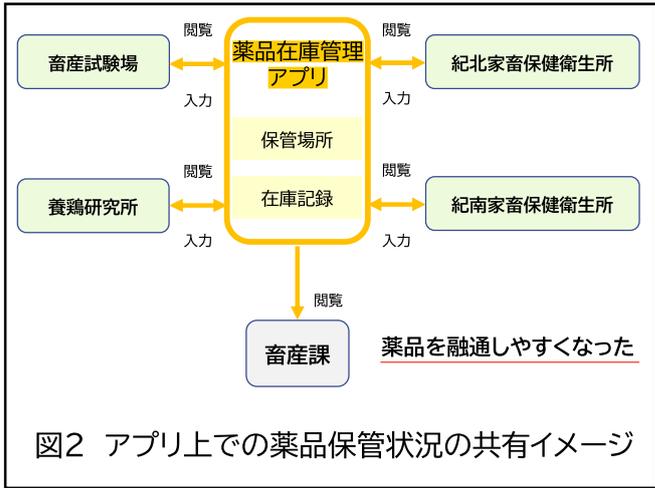


図2 アプリ上での薬品保管状況の共有イメージ



図3 管理者へ通知メール設定画面 (薬品ごとの詳細情報画面)

図4 野生いのしし豚熱検査アプリ 検査受付一覧画面

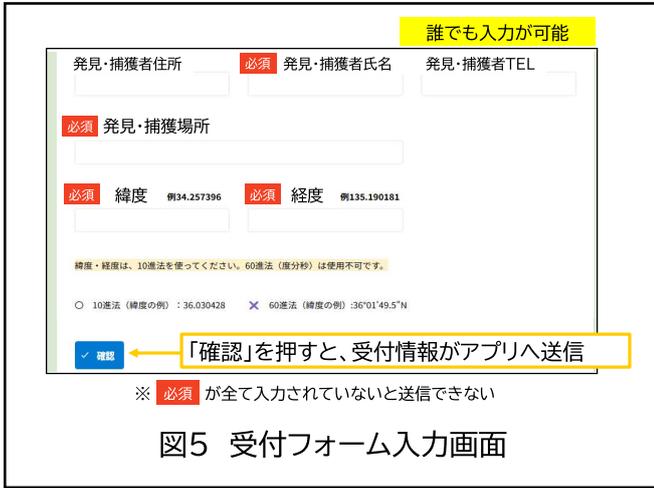


図5 受付フォーム入力画面

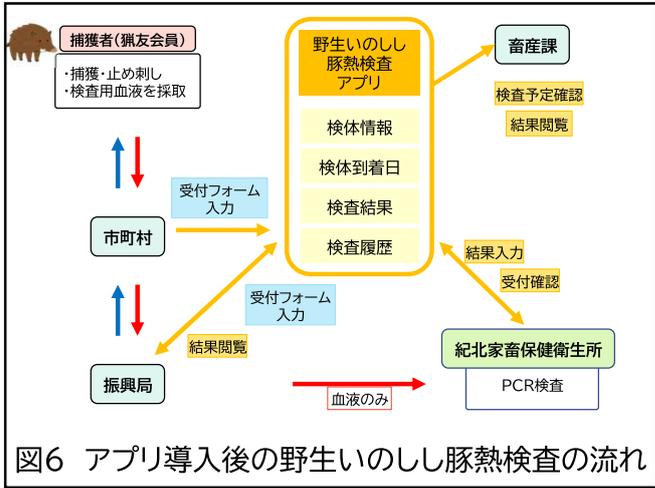


図6 アプリ導入後の野生いのしし豚熱検査の流れ

